



# 国際化の最前線から

## 国際化の最前線から



## コロナ禍に 国際交流の新たなチャンスを見出す

### ～第1回 交流の幅と奥行きを広げる好機～

株式会社電通 パブリック・アカウント・センター 有賀 勝

コロナ禍によって多くの国際交流が休止に追い込まれたが、非連続的な環境変化によって新たな可能性も生まれている。国際交流を次のステージに押し上げるチャンス到来という視点で見ると、新しい光景が広がる。

前提として、言わずもがなであるが、コロナ禍に関わらず相手先との血の通った関係性が維持されていることが必要だ。会えないことで Out of sight, out of mind. (去る者日々に疎し) になっていないか、これまで以上に密なコミュニケーションが求められる。マンネリ化していないか、意義を共有しているか、双方に有益な交流になっているか、などを点検するいい機会である。

関係性を人的なつながりのみに頼っている場合は、要注意だ。せっかくの素晴らしい関係が、異動などで人が変わるにより雲散霧消しないようこの際、記念日、協定などで「見える化」しておくこともオプションだ。

#### ◎「オンライン交流ならではの可能性」から発想する

だれでも場所を選ばず参加できるオンライン交流の手軽さには、無限の可能性がある。オンラインによるコミュニケーションが普通になった今日、リアル交流の「代替」や「補完」というとらえ方ではなく、オンライン交流のメリットを積極的に開拓しない手はない。

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会でカナダのホストタウンであった青森県三沢市がカナダチームと行ったオンライン交流会には、両国の大臣がリアルタイムで参加した。大胆に言うと、世界のどんな人も「招く」ことが可能な世界になったのである。アイデアを巡らせると、従来は考えもしなかった交流を地域にもたらしうる。

#### ◎対面交流なしでも成立するコンテンツを発掘する

関係性を活かし、交流相手の引き出しから、人々の心に響くコンテンツを探索する。コロナ禍の今だからこそ、

シャープな目で宝の山を発見できる。

例えば、イタリアパラリンピック委員会と事前合宿協定を結んだ仙台市。選手とのリアルな交流は限られたが、同委員会がイタリアで実施した、写真界の巨匠トスカ二氏による高さ3mのパラアスリートの巨大な写真展に着目した。同じくイタリアのホストタウンである岡山県矢掛町にも声をかけて、本国と同じ写真展を巡回で再現。観る人を圧倒する選手の巨大な写真が、勇気と威厳をもって人生の困難に立ち向かうことの重要性を訴えかけたこの企画は、期間延長の要望が寄せられるほど好評であった。まさに意志のあるところに道は開けるである。



仙台市と岡山県矢掛町は、イタリアのパラアスリートの巨大な写真展を開催（2021年1月）

#### プロフィール

有賀 勝（ありがまさる）

早稲田大学政経学部卒。米国ノースウエスタン大学ジャーナリズム大学院修士課程修了。マーケティング局で国内外のプランニング業務に従事。営業局、新聞局、東京オリパラ局を経て現職。国際大学（IUJ）でマーケティングを講義。著書に「未来志向のマーケティング戦略」（ダイヤモンド社、共著）、論文に「地域に残すオリパラレガシー」（時事通信社）など。